

自然と人間との共生

KOSMOS

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会



EXPO'90
FOUNDATION

こすもす

2025
春

第15号

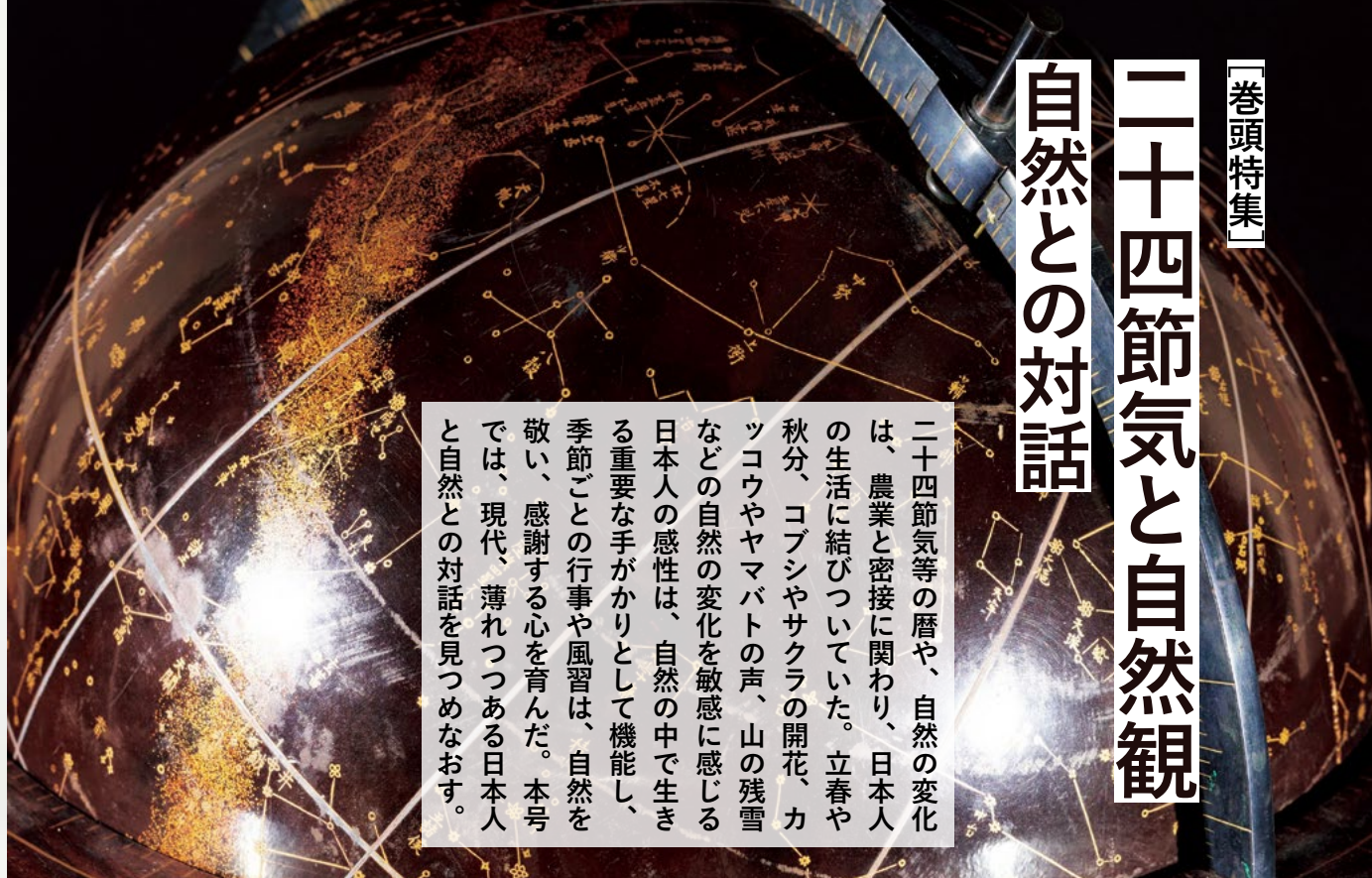
二十四節気と自然観 自然との対話



二十四節気と自然観

自然との対話

二十四節気等の暦や、自然の変化は、農業と密接に関わり、日本人の生活に結びついてきた。立春や秋分、コブシやサクラの開花、カッコウやヤマバトの声、山の残雪などの自然の変化を敏感に感じる日本人の感性は、自然の中で生きる重要な手がかりとして機能し、季節ごとの行事や風習は、自然を敬い、感謝する心を育んだ。本号では、現代、薄れつつある日本人と自然との対話を見つめなおす。



湯島聖堂伝来の天体儀。球面に金銀線で赤道・黄道を引き、星座とともに1700の恒星を記す江戸・安政年間（1772～81）、東京国立博物館蔵 出典：Colbase



国宝「扁平鈕式銅鐸」、弥生時代中期、伝香川県出土、東京国立博物館蔵 六つの区画に生き物と高床式建物や人の営みを描いた 出典：Colbase

日本における暦のはじまり

松尾 中国から暦の概念がもたらされたのは、欽明天皇の六世紀初めのことです。暦は仏教とともに伝来し、国府を通じて天皇より付与されて、全国が月日のレベルで時間を共有するようになりました。中国の二十四節気は、太陽の運

行、すなわち黄道に依拠しており、立春、立夏、立秋、立冬というように、四つの季節で一年周期の寒暖のサイクルが認識されるようになりました。

一方、より便利な何月何日という認識は、月の満ち欠け、月齢が基準になっています。

尾池 六世紀に百済を経て日本に渡来した、中国編さんの元嘉暦の

対談

二十四節気と日本人 天・地・人を結ぶ暦

尾池和夫 × 松尾恒一

京都市大学名誉教授

国立歴史民俗博物館教授

ことですね。

日本で使われた最初の太陰太陽暦で、以降、平安時代から江戸時代の初めまで八〇〇年以上使われた宣明暦、渋川春海が日本人として初めて編纂した貞享暦、明治に新暦に切り替わる直前の天保暦まで、いくつかあります。

西洋の暦にも変遷があり、私は昔、地震資料のデータベースを作るとき、年月日を計算しやすいように西暦に換算するのにずいぶん苦労しました。

松尾 三世紀末に書かれた中国の書物魏志倭人伝には、倭人（日本

人）は年の初めの正月や四季を知らないと記されています。

では、日本人はどのように一年のサイクルを認識していたかという、稲の種を蒔き田植えをする「春耕」から秋に収穫する「秋収」をもって、一年を認識していたことが知られています。また、春夏秋冬のように「春」を、一年の始まりと認識していたこともわかります。

尾池 太陰太陽暦では、太陽の運行を二十四節気によって表します。日本人は初め一年を二期で捉えていましたが、折々の気候変化は実



復元された長安の宮城「大明宮」の丹鳳門(西安市)
「二十四節気発祥の地の芒種かな」尾池和夫

こもって先祖を迎えるから、冬と夏とは似ています。そういう宗教的な行儀が集中するのが盆と正月。だから魏志倭人伝の頃の日本の二季文化というのは、春と秋というより、盆と正月です。当時、その風習はないわけですが。夏と冬が、卑弥呼なんか活躍するような宗教的行事をやる時期だったのではないかと。とくに冬は生きるのが厳し

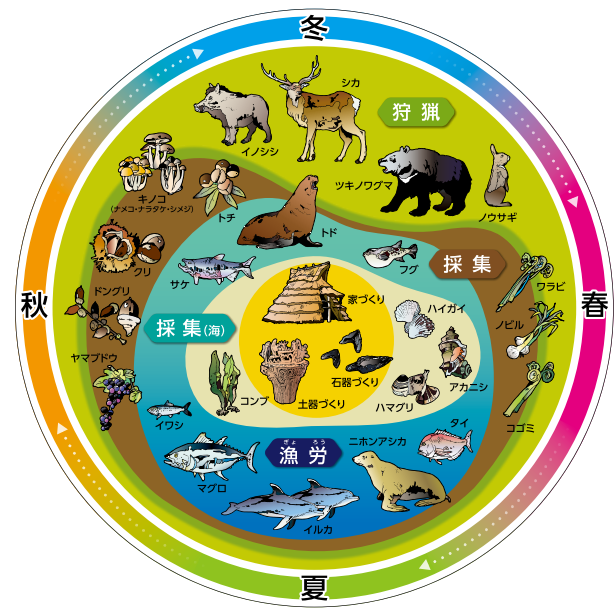
いから、そのために神楽などの行事があり、美味しい料理を作って食べる。そうしないと死んでしまうから、必死になっていろいろなことをやって乗り越えたと思います。

食から見た日本の風習

松尾 最初に日本人は暦を持たな

いから、そのために神楽などの行事があり、美味しい料理を作って食べる。そうしないと死んでしまうから、必死になっていろいろなことをやって乗り越えたと思います。

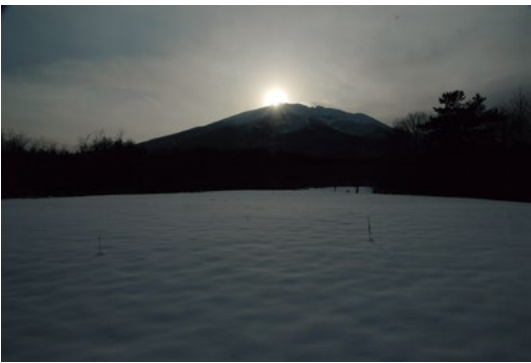
縄文人の季節的生業モデル(縄文カレンダー)



四季のある日本列島では、季節によって採取可能な動植物の量が大きく変動する。このため縄文時代の人々は、季節ごとに何を採取し、貯蔵するかを計画的に決め、食料に不自由ないように年間を適した生業を営んでいた 画像提供: 国立歴史民俗博物館



渋川春海が自らの観測に基づき、中国との経度差を補正して改良した貞享暦（1729年〔享保14〕年版）
出典：国立国会図書館



縄文人は、動植物の動向のほか、太陽の運行の規則性を景観の中で捉えることで冬至・夏至を起点とした時を認識することもできた。縄文時代晩期の青森県大森勝山遺跡環状列石から望む岩木山頂への冬至の日没は、それを知る一例（2010年撮影）
文・写真：太田原 潤（P.14参照）

感じていたので、中国の二十四節気を中心とする四季の考えに、すぐに馴染むことができたのではないだろうか。
奈良や京都は北緯三十五度ですが、長安（現在の西安市）とほぼ同じです。長安を真似して都をつ

くったわけです。
奈良時代末期に成立したといわれる万葉集には、持統天皇の「春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山」や、藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えね

でも風の音にぞおどろかれぬる」といった有名な歌があり、平安時代の古今和歌集にも在原業平の「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」をはじめ、季節を詠んだ歌がたくさんありますが、まだ春夏秋冬という分類の仕方は、明確には出てこない。鎌倉時代の新古今和歌集で初めて二十の項目が設けられ（巻第一、巻第二十）、「春歌」で始まり「夏歌」「秋歌」「冬歌」と続きます。
松尾 詩歌で言えば、その流れが

やがて江戸時代の季語を入れる俳句につながります。
尾池 ただ、いつを「夏」とするかは、日本の場合、二十四節気と少しズレがあります。今は二月から四月くらいを春と捉え、五月中旬頃から、二十四節気の立秋前日までを夏とします。でも、立秋は八月七日頃だから実態と合わない。最近は温暖化だからよけいにズレが大きいです。でも俳句では「残暑」や「秋暑し」などの季語で詠みます。
尾池 夏も同じで、お盆には家に

去年の夏の暑さは本当に異常で、秋がほとんどなくて、冬になったら例年にない大雪です。これは日本海の海水温の上昇により蒸発量が増大したのが原因で、夏の暑さだけでなくこの大雪も温暖化の影響です。
松尾 私が違った面から重要性を感じるのが冬です。「恩頼」という言葉がありますが、この「ふゆ」は、「御魂の増ゆ」の「ふゆ」が語源とされています。日照時間がつとも短く寒くなり、身体にとって辛い冬至から春にかけて日本各地で行われる神楽は、仲冬（大雪から小寒）の季語にもなっています。神楽の根本は、寒い時期に弱った生命に活力を与えることで、その儀式が「鎮魂祭」で、寒さで弱った身体から魂が離れないよう鎮め籠めるのです。
こうした冬のもつ信仰的な意味や習俗をいまに受け継ぐのがお正月です。大晦日に家族が家にこもって除夜の鐘を聞きながら年を越すことには、信仰的な意味があります。

二十四節気（にじゅうしせっき）

今でも立春、春分、夏至など、季節を表す言葉として用いられている暦。1年を春夏秋冬の四つの季節に分け、さらにそれぞれを六つに分けたもので、「節（せつ）または節気（せっき）」と「気（中 [ちゅう] または中気 [ちゅうき] とも呼ばれる）」が交互にある。太陰太陽暦（旧暦）の閏月を設ける基準となっており、中気のない月を閏月とするなど、二十四節気は、その年によって1日程度前後することがある。

季節	二十四節気名	月	新暦の日付
春	立春（りっしゅん）	1月節	2月4日頃
	雨水（うすい）	1月中	2月19日頃
	啓蟄（けいちつ）	2月節	3月5日頃
	春分（しゅんぶん）	2月中	3月21日頃
	清明（せいめい）	3月節	4月5日頃
夏	穀雨（こくう）	3月中	4月20日頃
	立夏（りっか）	4月節	5月5日頃
	小満（しょうまん）	4月中	5月21日頃
	芒種（ぼうしゅ）	5月節	6月6日頃
	夏至（げし）	5月中	6月21日頃
秋	小暑（しょうしょ）	6月節	7月7日頃
	大暑（たいしょ）	6月中	7月23日頃
	立秋（りっしゅう）	7月節	8月8日頃
	処暑（しょしょ）	7月中	8月23日頃
	白露（はくろ）	8月節	9月8日頃
冬	秋分（しゅうぶん）	8月中	9月23日頃
	寒露（かんろ）	9月節	10月8日頃
	霜降（そうこう）	9月中	10月24日頃
	立冬（りっとう）	10月節	11月7日頃
	小雪（しょうせつ）	10月中	11月22日頃
冬	大雪（たいせつ）	11月節	12月7日頃
	冬至（とうじ）	11月中	12月21日頃
	小寒（しょうかん）	12月節	1月5日頃
	大寒（だいかん）	12月中	1月21日頃

資料：国立国会図書館

2011年12月に行われた広島県庄原市の「比婆荒神神楽」。冬季の神楽で、集落で亡くなった人の霊の鎮魂といわれる 撮影：松尾恒一

非常に似ています。
松尾 「苗年」は新年を祝う祭日で、稲の収穫が終わった後になります。つまり、一年の始まりはそれぞれ異なるということです。
尾池 そういう意味では、今でも日本では業界によって年度が違います。役所と学校は四月から始まるし、京都の舞妓さん、芸妓さんは挨拶回りと清掃を終えて、十二月十三日に事始め、つまり新年を迎えます。
松尾 「事」という漢字はとても大

事で、食事、神事、茶事など、漠然とした「こと」以上の、何か特別な神聖な意味をもっています。鬼ごっこやままごとなども、本来は神事から来ていると言われていますね。
さきほどの正月の設えというと、門松は年神様を迎える特別の入口を示す役割があります。門松の松は枯れない常緑樹であることに意味があるのです。
キリスト教のクリスマスも、ゲルマン民族が冬至に樅の木を立て

て祝った民俗がはじまりと言われています。それがキリスト教の行事になることにより、モミの木に変わりますが、家に常緑樹を立てて祝う点が共通していることはとても興味深いと思います。
尾池 季語でいうと、松は、新年の門松、松納めから始まって、春の若松、松の芯、松の花、夏の松落葉、秋の松茸、松手入、新松子、冬の「松飾る」まで、日本人の生活に密着して、四季折々に詠まれます。



が川で待ち構えて仕留めていました。また、清代、日本の江戸時代ですが、台湾の先住民の狩猟を描いた絵画には、やはり山の下を流れる川が描かれています。山川と狩猟の関係はとても興味深いです。
尾池 狩猟には、捌くための水が必要ですから理にかなっています。つまり、食べることから理由が見えてきます。獣肉を食すことが禁忌であれば、生薬と言って逃れる。「薬食い」というのは、イノシシかシカを食べることだそうです。
松尾 沖縄や奄美では「ぬちぐすい（命の薬）」という言葉をしばしば聞きますが、食べ物は何よりの

薬であるという考えをよく表しています。
尾池 それは禁止されたからですね。イノシシを山クジラと呼び、なんだかんだと食べていました。
家の役割
松尾 イノシシで思い出したのですが、「家」という漢字は、屋根を表すウ冠の下部分は「豚」を意味しています。「家」の意味の根本は、祭祀のための構築物・空間という意味です。今、お祭りというと神社やお寺など神様、仏様を祀る宗教施設をイメージしますが、

これらは神仏の住まいで、漢字「家」が表している、そもそもの意味がよく理解できます。
尾池 だから正月の習慣は全部家長が担っているわけです。今では難しいけれど、注連縄も昔は家長が綯っていたし、正月料理をいただく箸の箸袋についても、家長が大晦日に家族の名前をそれぞれの箸袋に記入し、客用には「上」と書いて神棚に供えておきました。取り分ける箸には「海山」と書いて海の幸、山の幸を取り分ける。
松尾 箸といえば、伊賀地方の水田地域では樅の木の樹皮を剥いて作った餅を焼く餅箸や、正月十五日に小豆粥を食べるのに、茅を使った箸を使います。箸を特別な祭具として用いる神社祭祀は日本各地に見られ、広島県の山村や伊豆地方の水田地域の集落の神事でも目にしました。
尾池 礼儀箸やネギ一本で箸代りにしたり。箸にこだわる日本の文化があります。
松尾 そもそも家自体が大きな祭壇ですから、神棚や仏壇などは必要ありませんでした。それ以前の



『番社采風図』より「捕鹿」(清朝時代、18世紀)台湾の先住民の生活を描いた風俗画で、本図では獵師と犬に追われたシカが川（画面左下）へ逃げる様子を描いている 中央研究院歴史言語研究所蔵

古い設えとして、壁にかける方法があると思います。広島県の山村で、正月の飾りとして、壁に稲穂やスルメなどを吊るして掛けているのを見たことがあります。
中国貴州省の「ミャオ（苗）」という少数民族の地域の端午節を調査した際も、粽を壁にかけていたのを目にしました。
尾池 中国の雲南省では、田んぼの作り方や、笠をかぶって歌いながら田植えをする姿など、日本と



松尾恒一（まつお・こういち）
1963年東京都生まれ。専門は民俗宗教、日亜欧交流史。国内外でフィールドワークを行い、古代から現代まで外来文化との混淆や対立により形成された日本の民俗信仰や習俗の変遷を研究。『東アジア世界の民俗』『日本の民俗宗教』など著書多数。千葉大学大学院客員教授兼任。
撮影：逢坂憲吾（pp. 6, 9, 13）

日本固有の風習と暦

尾池 明治の初め、政府が月給を十三回払わなくて済むようにと、慌てて西暦に切り替えるまでは、日本では太陰太陽暦を使っていた。太陰暦の十二月は太陽年より十日ほど短いため、月に基づいただけの暦では季節がずれていくので、それを太陽の運行で補正するわけです。

松尾 「年内立春」という言葉が季語にありますね。これは珍しい年でしょうか。

尾池 旧暦の元日の前に立春になるのが年内立春、あとになるのが新年立春で、同じくらいの発生率です。それに対して「朔旦立春」というのは、年初めの朔（旧暦元旦）と立春がぴったり合う年のことで、概ね十九年周期で訪れる。次に来るのは、二〇三八年です。僕の論文で、南海トラフの巨大地震が起こるのを二〇三八年と予測しており、ちょうど朔旦立春と一致します。

松尾 中国では立春より先に（旧

暦の）元日が来る年というのは良くない年だという考え方がありません。そうしたことより、結婚を控えたりすると中国の留学生から教わりました。

尾池 私は悪い考えは排除し、むしろ朔旦立春というのは、めったにないことなので大祝いする。ですから、二〇三八年はすごくいい年で、南海トラフの地震でも、それまでに防災対策が進展していると期待しています。

私の人生を振り返ると、一九五〇年と九二年の二度ありました。最初は小学生の時で、二度目は地震の研究を一生懸命やっていた頃なので、よく覚えています。つまり、一生に二、三回しかない、本当に珍しい年なのでお祝いすべきでしょう。

めったにないから、朔旦立春を詠んだ俳句や短歌は少ない。新年立春、年内立春はよくありますが、一方、年内立春を年末の季語に入れている歳時記があります。これは立春の間違いなので、出版社に伝えるつもりですし、私が主宰する氷室俳句会で編集している『新

のとも説かれています。

また、松尾芭蕉が故郷伊賀で正月に詠んだ「山里は万歳遅し梅の花」の句を引用し、こうした光景は雪国では三月になってようやく目にすることができると述べています。

尾池 「玉栗」も新年の季語ですが、季語は京都や畿内で生まれているので、北緯三十五度が起点になります。たしかに、いまや北海道から沖縄まで俳句を詠む人は全国にいますから、季語のズレをどうするかは大きな問題で、北海道の俳人は六月にならないと桜が詠めない。これは仕方がないのですが、



鈴木牧之『北越雪譜』二編巻一より「雪の正月」(1841年刊)
江戸後期に越後魚沼の雪国の生活を紹介した書籍。初編3巻(1837年刊)と二編4巻(1841年刊)。風俗・暮らし・方言・産業などが、豊富な挿絵とともに詳細に記されており、江戸で出版され人気を博す。岩波文庫版(1936年)以降、現代訳版や英語版も出版されている

氷室歳時記』には、前例を鵜呑みにせず、季語をすべて精査して分類しています。そもそも立春は「春が始まる」ことですから。

松尾 立春の前日が日本でできた

その土地独特の「地貌季語」と呼ばれるものが出てきて、沖縄などいろいろあります。

季語は語尾を伸ばす京都弁に由来すると言われています。「目え、歯あ、手え」と二音、「頭、體」と三音、足して七音、俳句の一七文字、和歌の三十一文字もすべて素数です。この素数のリズムについてのが、どうも日本人にとって気持ちいいらしい。三三七拍子もそうですしう？

松尾 語調だけでなく、注連縄も縄の下に七本、五本、三本の「下がり」と呼ばれる藁を垂らします。

尾池 「七五三」と書いて「しめ」と読ませますね。

松尾 七五三も中国にはないので日本独自の行事ですが、中国は対照的に偶数がよい数値とされ、お祝いでは偶数の金額にします。

日本の伝統の多くは古代に伝えられた中国の影響が強いのですが、日本独自の習俗も少なくありません。

尾池 むしろあまり影響されていないのでは？ 例えば、還暦（六十歳）や古希（七十歳）までは中

国でも祝うけど、その後の喜寿や傘寿、米寿などは、漢字の形を数字に見立てたもので、白寿など、「百」から「一」を引いて九十九歳というように、これらは日本人の発明です。

自然現象や気候変動を読み解く

松尾 日本の仏教は中国経由ですが、仏教行事である「お彼岸」を、二十四節気の春分と秋分、その前後三日を入れた七日間に行うのは、



6月の行事「水口まつり」には、苗や早乙女の手ぬぐいなど田植えにまつわる供物で豊作を祈る
写真提供：室礼三千



尾池和夫（おいけ・かずお）
1940年東京都生まれ。専門は地震学、地球科学。京都大学第24代総長、日本ジオパーク委員長、京都造形芸術大学学長などを歴任。現在、京都芸術大学客員教授。俳人としても知られ「氷室俳句会」を主宰。『2038年南海トラフの巨大地震』『四季の地球科学』など著書多数。



福井県年縞博物館に展示された水月湖の年縞。過去の環境変動が高精度に復元されており、「地球のものさし」として世界的に注目される。写真には天正地震（1586年）の痕跡が見える
写真提供：福井県年縞博物館

食物と年中行事

井県年縞博物館が開館しています。その調査の写真を見ると、平安時代は暑くなかった。ハマグリの子貝殻の筋や木の年輪、火山灰の堆積など、自然界の縞は博物学のように、いろいろなことが読み取れます。

松尾 北国の雪の中での生活を記した『北越雪譜』にはまた、「削り氷」、現在のかき氷の話が出てきます。氷を削って食するのは江戸から入ってきた先進の食文化だったようで、最初はきな粉をかけて食べ、その後、貴重な砂糖をかけた時の感動が記されています。夏に氷を食するのはたいへんな贅沢で、古代には、冬のうちに切り取った氷を溶けないように藁で何重にも巻いて、氷室（ひむろ）という洞窟の中で保存して、天皇に献上していました。

尾池 私の俳句結社も「氷室」というのですが、京都の北山にも氷室という地名がありますし、奈良の氷室神社ではかき氷が食べられ

りますね。十五夜に豊作を祈願し満月を見立てた芋を供えるので「芋名月」と呼びますが、芋（ヤマイモ、サトイモ）・栗・栃などの木の実は、稲作以前の時代に貴重な糖質でした。稲が入ってから米や餅が供物として重要度を増していきましたが、稲作伝来以前、縄文時代の食文化も継承しているのではないのでしょうか。

また、供物に添えるススキは、まもなく来る秋の収穫の稲穂を表し、稲作文化として日本で生まれた習俗といえます。

尾池 たしかに、いろいろなものが流入し、イノシシと芋を栄養源にしていた縄文時代の生活は一変しましたが、もう一つ大事な要素は気候変動です。縄文時代と平安時代、さらに江戸時代とは今と全く気候が違います。

例えば、芭蕉の俳句を全部集めてみると、暑いという季語はまったく出てこない。あの源氏物語を見ても、四季のことを書いていても、暑い、寒いの記事はない。十二単を着て生活できるわけなので、今とは気温が違うと思う。だから、

ます。

松尾 氷室神社では、七一年に平城京に氷を収める献氷の勅祭が行われ、いまも直方体の氷塊を供えるお祭りを見たことがあります。が、東京御茶ノ水の正教の教会ニコライ堂で一月にイエスの洗礼を祝い、大人の背たけくらいの巨大な氷の十字架を祀るロシア正教の行事「神現祭」が行われています。

尾池 氷は貴重な献上品ですから、日本では都の周囲に氷室がありました。加賀藩が大寒の頃に仕込んだ白山雪を旧暦六月朔日に江戸幕府に献上した歴史を、金沢の涌井温泉で「氷室開き」や氷室饅頭として復活させ観光資源にしています。

松尾 饅頭は日本の行事の御馳走のひとつでした。十四世紀に渡来した元の僧、林浄因が居住し饅頭を作った奈良の漢國神社が発祥の地とされています。その頃は、小豆はあっても砂糖がないので甘茶の蔓で甘味を出しました。それが塩瀬饅頭の元祖だといわれます。このように仏教との関係が深いのです。

和歌の季語をくまなく調べることであれば、日本の気候変動がわかるのではないかと思っています。芭蕉に関しては奥の細道から全部調べていますが、夏の句である「閑さや岩にしみ入る蟬の声」も「五月雨をあつめて早し最上川」も、涼しさが表れています。月刊誌『俳壇』の特集号の総論で「俳句と気象 天地人の世界」という題で、このようなことを書いています。

松尾 吉田兼好は『徒然草』に「家の作りやうは、夏をむねとすべし」と書いています。冬の厳しさは火鉢や重ね着でしのげるので、夏の暑さをどのように耐えるのかを、古代・中世の人々にとっては優先して家のつくりを工夫していたと考えられます。

尾池 「年縞」をご存知ですか？福井県の三方五湖のひとつ水月湖の湖底に、一年ごとに濃淡一対で形成された約七万年分の縞模様があり、一九九一年のボーリング調査で発見されました。寒暖で縞の幅が変わるので、過去の気候変動や自然災害などの地球の歴史がわかる世界的な遺産で、二〇一八年には福



漢國神社の饅頭塚

日本のお節の定番に「きんとん」があります。栗は縄文時代から食されていました。一方サツマイモはその名の通り琉球・薩摩経由で江戸時代に入ってきました。伝統食と言われているものでも、中国やヨーロッパの大航海によるアジア進出など、外国との交流によって生み出されたものが少なくありません。

尾池 日本人が、いつから何を食べ始めたかが重要です。江戸時代



旧暦9月の十三夜（栗名月）、供物とともに月を愛でる
写真提供：室礼三千

日本独自の習慣です。彼岸では、特別なご馳走として、餛にくるんだ餅を、春はぼた餅、秋はおはぎとして食します。諸説ありますが、それぞれ牡丹と萩という季節の植物に因んだ呼称と言われます。

外来の概念を風土や自然に結びつけ、固有の伝統にするとともに、日本の独自性を見ることができるとは、

尾池 お月見も中国伝来の行事ですが、日本には旧暦の九月十三日に「十三夜の月」を愛でる「後の

月」の風習があります。新月から数えて十五夜は満月、十三夜は満月には少し欠月で、同じ場所でも両方を見ることを「二夜の月」と呼び、一方だけを見る「片月見」は不吉と考えられていました。片見月を忌むという習慣のために、江戸時代には自宅で月見をする習慣が定着しました。

八月の満月を「芋名月」、九月の十三夜の月を「栗名月、豆名月」と俳句では詠みます。

松尾 それは家の重要性につなが

1月7日	人日の節句(七草の節句)
3月3日	上巳の節句(桃の節句)
5月5日	端午の節句(菖蒲の節句)
7月7日	七夕の節句(星祭り)
9月9日	重陽の節句(菊の節句)



端午の節句の飾り、吹き流しと菖蒲
写真提供：室礼三子



春から秋にかけての農業の風景を描いた「小袖 茶綸子地四季耕作風景模様」部分、江戸時代、東京国立近代美術館蔵
出典：Colbase

中期に編纂された『和漢三才図会』という百科事典に当時の食事が詳しく載っていて、いまはネットで内容が検索できるので、そこに載っている食材セットのすずしろ（大根）は、葉が切られたものが多い。草粥なのですから、葉を入れるべきと言いたいですね。

松尾 七草は五節句のひとつで、桃の節句（雛祭り）、菖蒲（端午）の節句、笹の節句（七夕）、菊の節句（重陽）と続きます。昨日は桃

の節句で明日は啓蟄。端午の節句はまちがいに中国起源ですが、雛祭りは中国の上巳節を起源とする説をよく見ますが、私は日本で生まれた行事ではないかと考えています。日本での起源は不明で、平安時代の年中行事には見られませんが、江戸時代にはひな人形を飾って女兒の成長を願う雛祭りが行われていました。

中国の上巳節句では禊ぎのために川や池など水に入る行事がありますが、桃を飾ることはありません。五月五日や九月九日のように、月と日を重ねる発想は中国らしい。

尾池 七夕節句は、冷泉家で平安

天・地・人を結ぶ暦

尾池 私は地震学者ですから、三月三日というと、昭和三陸津波（一九三三年）で、旧暦五月五日（明治二九年六月一五日）にも東北で大津波が発生した。どちらの節句も大津波が起っています。

盛岡市の俳人、小原啄葉の「桃

の日の母に津波の記憶あり」という句があり、節句のたびにひな人形を見て思い出す人がいます。

松尾 節句の「句」は、民俗学者はしばしば供物の「供」、すなわち「節供」の表記が正しいとします。たしかに古い文献に「節供」が出てきますが、そうした説明だけでは充分ではありません。中国では正月十五日に満月を祝う「元宵節」「端午節」のように、「節」は日

本の年中行事にあたる語で、「句」も節目を意味していますから、現在の一般的な表記「節句」は、日本語としてその意味をよく表していると考えます。

語源でいうと、月の呼称、例えば六月を「きさらぎ」と呼ぶ謂われはわかっていません。十二月の和名の語源は現在なお不明なものが多いです。そのなかで唯一、五月は「五月雨」や「早乙女」、「さつき」と「さ」がつかます。地方には、田の神様を「サンバイ」と呼ぶ地域があり、農耕、特に稲作と関係する日本固有の呼び方であると考えてよいと思います。

尾池 風習と密接に関わっているでしょうね。例えば、田植えの後に五穀豊穰と無病息災を祈る「虫送り」という農村の伝統行事では、紙や藁の人形を悪霊に見立てて、火を点けた縄を振り回したり、鉦や太鼓を打ち鳴らしながら川に流しに行きます。

その道具やかけ声に何かヒントはないでしょうか。かけ声は、子どもたちが意味もわからずそのまま口伝えて叫びますし、稲作は日

本文化の基本ですから。私の著書『季語を食べる』（淡交社）にもくわしく紹介しました。

松尾 二十四節気は、農耕を中心とした日本の一年サイクルの季節感をよく表しています。北半球のヨーロッパも、春を新しい年の始まりと考え、冬は春を迎えるために乗り越える厳しい季節と認識し、生活を営んできました。一年のサイクルで農耕を営んできた季節の認識といった点で、北半球で緯度

とほぼ同じくする地域の汎人類的な文化としての側面も重要であると考えます。

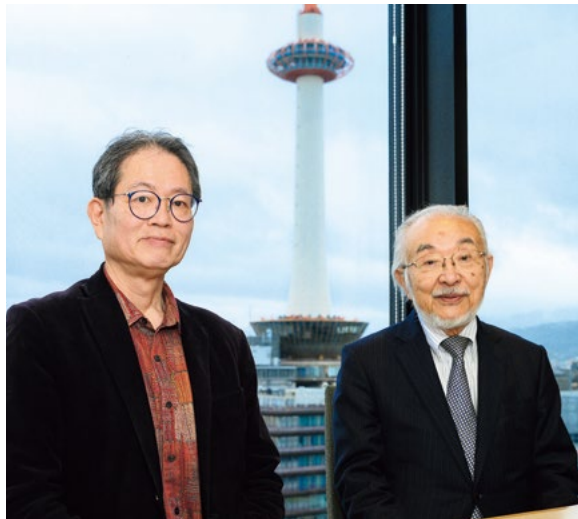
尾池 農耕との関わりでいえば、二十四節気には、「啓蟄」や「穀雨」「芒種」など、農事に直接的なものもありますし、さらに細かく、七十二候として生物や自然現象を見たものもあります。暦は、天・地・人をむすぶものですから、自然と人間との共生のための仕組みにほかなりません。



松尾恒一『日本の民俗宗教』ちくま新書、2019年



尾池和夫『季語を食べる 地球の恵みを科学する』淡交社、2024年



対談は京都タワーや比叡の山並みを望む部屋で、旬の料理とともに

二十四節気と自然暦

太田原潤

神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員

文字の暦と非文字の暦

春

先に咲くコブシの花を東北地方では「田打ち桜」といい、その開花を農作業の目安にした。花や昆虫、鳥などの変化で時を知る事例は全国的に見られる。

また、雪形も同様に田の作業の指標とされた。八甲田山の雪形は一八世紀に菅江真澄が記録し、それを柳田國男や宮本常一が紹介した。積雪地帯に限られるものの、各地の事例も知られる。古来、人々は、こうした生物や景観に時の手掛か

りを求めた。そうした経験知の蓄積による非文字の暦が自然暦だ。

それぞれの事象が現れる時期は、場所により、年により異なるが、自然の中の同調性や回帰性の相関に着目して時を読んだ。

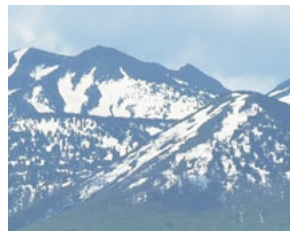
自然暦は文字暦の浸透とともに衰退したとされるが、実際には旧暦と併存し、現行暦の元にも残る。年ごとの季節の遅速を知るには、文字暦を使う人も自然観察によらざるを得ず、自然暦に頼る人は文字暦に参照点を求めるしかない。

参照点は現行暦では日付、旧暦で



菅江真澄が描いた八甲田山の雪形「蟹の缺」「牛の首」「種まきオッコ」(写本では左2つが白黒反転)

出典：寛政8年(1796)の日記『すみかの山』秋田県立博物館所蔵写本



真澄が描いた3種の雪形は今も見ることができる(2020年、筆者撮影)

は二十四節気となる。二十四節気が現行暦の日付と調和的なのは、それが旧暦(太陰太陽暦)の中の太陽暦の要素だからだが、自然暦ではそうした太陽の運行に基づく定点を参照することで年ごとの季節の遅速を捉えることができた。

何に季節の進行の参照点を求めたのだろうか。縄文時代には冬至や夏至の太陽の出没点を意識して配置したと思われる遺構がある。縄文人は太陽の出没点の両端が暦の起点となることを経験的に知ったのだろう。久米島のウティダ石や北米ホピ族のホライズンカレンダーと同様の認識だ。縄文人がそれを知ることができた背景には、旧石器時代の遊動的な生活から定住への進展があり、定点から自然を観ることの一般化があった。

文字暦以前

暦の発達は稲作との関係で語られがちだが、文字暦の波及は五世紀以降なのに対し、稲作が行われるのはそれ以前からだ。初期の稲作で使用可能な暦は自然暦となる。しかし暦を必要とするのは稲作に限らない。むしろ狩猟、漁撈、採集を生業とした縄文時代こそ詳細な季節認識が必須となる。

文字暦がない時代の自然暦は、

神仏に供する「室礼」の世界

感謝の心を供えるモノとコト

室

礼は元々「設^{しつゝ}ひ」と書き、動詞は「しつらふ」となる。平安時代より様々な儀式に調度装束などを特別に飾り配したことであり、季節や人生の節目に、空間や衣食を整えるものとして、現代までそれぞれの時代に日本文化を

体現してきた。その大本は、古来より日本人が行ってきた「神仏に供する」ということにあり、お天道様に祈りや感謝の心を込め供える行為は、やがて家の中で行われる「行事」の核となった。現在、それが私たちの生活の場に伝わる「家庭内文化」と呼ばれる「モノとコト」であると考えられる。

室礼の中心となる「盆果」は「盛り物」と呼ばれ、祭事や行事の「季節」を、花や果実、野菜本来の個性を尊重し、その美しさと生命力の躍動を盆に盛って表現する。「季節を盛る」「言葉を盛る」「心を盛る」の三つを基本にデザインされ、例えば二つ目では、植物の性質を生かし、そこに言葉を組み合わせる面白味がある。

室礼との出会い
小さな庭に宿る宇宙

今から四十年前の一九八五年、

山本三千子

室礼三千主宰

日航機事故で夫を失い失意の底にいた時、いけばな流派「南宋瓶華」の四世宗家、田川松雨先生に師事する縁に恵まれた。何百年も続いていた年中行事を論理的でありながら書物(文字)ではなく、花や盛物を通して表す「室礼」に深く感銘を受け、以来、半世紀にわたるその世界に向き合ってきた。

宗家からは、庭についても学んだ。まず供養花である桜を入れ、本来は桜と対になる柳の替わりに、茶庭三木の百日紅、柏、隠れ蓑を加えた。どの木も天に向かって枝葉を張り、柏は親葉が枯れても冬の間は落ちることなく新芽を守ってくれる。我家の庭には池がないので、その代わりに大きな壺を池に見立てた。さらに、庭の中央に蹲^{つくばい}と金具の燈籠^{とうろう}を置くことで、宗家の教えの通り「五行」である木、火、土、金、水が庭の内に揃った。さらに庭の隅に拵えた上部

自邸の庭と季節の室礼



が平らな石の上に、季節ごとの盛り物をおえれば、小さな庭に大宇宙が生まれる。

先人が大切に育んできた年中行事である「コト」を、神仏、先祖、親子、住まい、道具など様々な「つながり」を敬い、身近な「モノ」で表現する室礼は、自然と人との一体感を築くことのできる家庭内文化であり、次世代へとつなげていかねばと思う。

やまと・みちこ
一九四四年新潟県生まれ。南宋瓶華四世宗家・田川松雨に師事し、九五年より日本の年中行事や生活文化を研究する教室「室礼三千」を主宰。「暮らしの室礼十二か月」など著書多数。

宝生紗樹

アトリエオガ・ジャパン理事

四季と成長を表す意匠

日

本の四季は、その移ろいとともに私たちの生活に深く結びつき、文化や習慣に大きな影響を与えてきた。この繊細な季節感、衣服や装飾品の意匠にも色濃く反映され、日本人の美意識を象徴する要素の一つとなっている。

一般的に日本髪として認識されている髪型の多くは、江戸時代に発展していった。様々な結い方が生み出され、武家や町人といった身分や職業、年齢によって使い分けられるようになった。現在も京都の花街では、年少の舞妓が「割れしのぶ」、二年から三年経つと「おふく」といった髪型を地毛で結い上げ、その成長に応じて着物や簪^{かんざし}といった装いに変化が表れる。デビュー直後は華やかなデザインの着物や豪華な刺繍の入った襟を身につけるが、経験を重ねるにつれて、落ち着いたデザインかつ柔らかな色合いのものへと変わっていく。そして、月ごとに異なる意匠を施した簪を挿すことで、季節の移ろいを感じさせる。

簪にうつる四季のかたち

一月は正月を意識した松竹梅や羽子板の簪を挿す。松の内には黒紋付の正装に身を包み、豊穣を願う稲穂を添える。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」ということわざ



あやめの簪



「割れしのぶ」の舞妓。顔横に垂れる舞妓ならではの簪

のように、芸の道に精進しながら、慎ましくあろうとする舞妓の在り方とも重なり、年長の舞妓が結う「奴^{やつ}」と呼ばれる髪型が、初春のめでたさを引き立てる。二月は梅がほころび、三月には水仙や菜の花が黄色く咲き誇る。四月には満開の桜が京の春を彩り、祇園甲部では都をどりや華やかに幕を開ける。五月は風に揺れる藤やあやめが涼しげな趣を添え、六月は紫陽花や柳がしなやかに枝を垂れ、夏

の気配を表し、七月は団扇の簪が涼を呼び、年長の舞妓は祇園祭期間中「勝山」という髪型を結う。八月はすすきや朝顔が夏の名残を映し出し、九月は桔梗が咲き、秋の趣が漂い始める。十月は菊が優雅に香り、十一月には紅葉が深まるにつれ、冬の気配が次第に濃くなる。十二月はまねき^いと餅花や縁起物の簪を挿し、師走の慌ただしさの中、新たな年の訪れを心待ちにする華やいだ空気に包まれる。

このように、季節を象徴する花や風物が精巧にあらわれた簪は、職人が一つ一つ丁寧に手掛けており、その細やかな意匠には日本の美意識が息づいている。舞妓の装いは、単なる華やかさにとどまらず、四季の移ろいや格式を大切にする伝統の一端を担い、日本ならではの美しさを今に伝えている。

*1 毎年十二月の「吉例顔見世興行」(南座)で飾られる演者の紋と名を記した看板

ほうしよふ・さき
能のワキ方、下掛宝生流の宗家に生まれる。父は「間国宝の宝生欣哉氏」。京都市立芸術大学大学院修了後、立命館大学大学院で、全国花街における舞踊公演の歴史と文化をテーマに研究を続ける。

日本
植物紀行



11

監修
清水 弘

小輪で花色変異も少ない素朴な山野草
アヤメ

日本列島には約5,000種類の在来植物があるといわれていますが、開発や乱獲、外来種の侵入や気候変動などの影響で、その生育地や個体数は減少しています。花博記念協会は、こうした在来植物の現状を調査し、植物本体を採取することなく動画で記録しました。今では生育していない、失われた地域もありますが、その成果は「プラント・フォト・ハンティング」として、協会ホームページで公開しています。このコーナーでは、貴重なデータの中から、特徴的な種を取り上げて紹介します。

*学会や展示会などへの動画 (DVD) の貸し出しもしています。 <https://www.expo-cosmos.or.jp/main/pph/index.html>



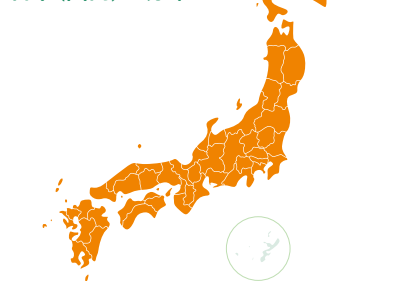
楡形山 (山梨県) に咲くアヤメ

学名: *Iris sanguinea*

分布: 日本、朝鮮半島、中国東北部、モンゴル、アムール、ウスリー、ダフリア

開花期: 4~5月

日本(国内)の分布



北海道厚岸町あやめヶ原のヒオウギアヤメ

ア

ヤメはアヤメ科の多年草で、日本、朝鮮半島、中国東北部、シベリアが原産です。「三寸あやめ」「五寸あやめ」といわれる矮性の紫や白花、藤桃色、斑咲き、筋入りあやめなどがあります。花の形が似ているカキツバタやハナシヨウブは湿地に咲きますが、アヤメは乾燥した山野や日当たりのよい草地を好みます。

アヤメやクロッカス、フリージアやグラジオラスなど、色鮮やかな美しい花を咲かせるアヤメ科の植物は、日本ではアヤメ属の六種二変種とヒオウギが野生するにすぎませんが、世界では七十属千五

百種を数え、相当に大きな科を形成しています。分布域は熱帯から亜寒帯まで、ほとんど全世界に及びます。

アヤメ科の花は両性で六枚の花被片があり、おしべは三個で内側の花被片と互生しています。子房は三室、下位で、先に三裂する花柱があります。これらアヤメ科の性質の多くはヒガンバナ科やユリ科の性質に共通しています。日本のアヤメの名所としては、山梨県の楡形山の裸山が有名です。また、アヤメに最も近縁のヒオウギアヤメでは、北海道の「あやめヶ原」が唯一、知られる場所です。

古典文学や句歌に詠まれてきた「あやめ」はシヨウブ科のシヨウブやアヤメ科のハナシヨウブ、さらにはイネ科のマコモなどの幅広い植物の範疇を意味します。また、日本各地で行われる夏の風物詩「あやめ祭り」も「花菖蒲祭り」のことです。江戸時代に多くの植物が園芸化されましたが、アヤメは数品種が報告されているだけで、ハナシヨウブの独壇場でした。アヤメはむしろ山野草に入る植物で、小輪で花色変異も少ない素朴さが魅力と言えるでしょう。なお、野生としては絶滅したトバタアヤメという一変種があります。

私を育てた 〈風と景〉

幼少期の記憶のなかの景色、人生のターニング・ポイントにまつわる思い出の場所、風の匂い、聞こえる音楽、ふと脳裏に浮かびあがる「心象風景」……。大切な「風と景」について語っていただきます。



終戦直後に祖母を訪ねてきた2人のアメリカ人を囲んで。右端が著者（1947年）

熱海で撮った一枚の写真から 私とアメリカの八十年

久野明子 日米協会副会長

今 年は戦後八十年。あの太平洋戦争がなかったら、この一枚の写真は存在しなかったかもしれない。これは昭和二十二年（一九四七）、私が七歳の時、疎開先だった熱海の祖母の別荘の庭で家族と二人のアメリカ人と一緒に写したものである。戦後二年も経っているのに東京の家に戻れなかったのは、占領軍に我が家を接収されていたからだ。まだ小学生だった私には接収の意味など理解できず、戦争が終わってもそのまま熱海に住めることがとても嬉しかったのを覚えている。

庭の正面には、ゆったりと煙を吐いている大島、中学生になったらあそこまで泳いでみたいなと密

かに思っていた初島がくつきりと見えていた。広い芝生の上でめぐり返しをしてはお転婆娘と祖母によく叱られた。温暖な気候のため、裏山のみかんの木々は甘い実を沢山つけ、そこはままと遊びの絶好の場所になった。庭の奥にあるサボテンには赤や黄色の花が咲き、傍には祖父がマダガスカル島で拾ったという実から育ったナツメヤシの木が二本そびえていた。学校から帰るとランドセルを放り出して、近所の友だちと日が暮れるまで遊び回った。そんな熱海が私は大好きだった。

アメリカからの来客

ある日、母から突然、「遠いアメ

リカからお客様が見えるので、ママの言う通りに真似をしてご挨拶するのよ」と言われた。それは「ハーワーユー。マイネームイズアキコ」であった。これが、その後何十年も付き合うことになる英語との初めての出会いであった。茶目っ気のある母は、お客様の名前を私が覚えられるようにと、「母さん出べそを突つた」と歌うように耳元でささやいてくれた。お客様の名前は、「Mr. Kar」と「Mr. Davis」であった。

小学生だった私は、何故占領下の日本に、アメリカ人二人が熱海くんだりまで来たのか分からなかった。ただ、生まれて初めて会った二人のアメリカ人の手がとても

大きくて温かったことは、今でもはっきりと覚えている。

アメリカという国が、戦時中でも子供の私の中で敵国だったこと



米国マサチューセッツ州ファルマスにて、曾祖母の大山捨松の講演を行う著者（2016年夏）



1999年、CWAJ創立50周年記念の昼食会が開かれた会場で。中央が著者

は一度もなかった。母からは、「あの海に向こうにあるアメリカというお国でママはお勉強したのよ」と聞かされ、お風呂の中では「アンクルトムの小屋」のお話を聞いたり、アメリカの民謡を歌ったり、アメリカの民話を歌ったり、ある日母に、「今日からママと呼んではいけません。お母ちゃまと呼ぶのよ」と言われた時、どうしてかしらと不審に思ったことはある。今考えてみると、日本中が鬼畜米英一色となっていた頃であった。

カーさんとデベソさんが熱海まで訪ねてきた相手は、母ではなく祖母だったことを父から聞いたのは、私が東京で中学生になった頃であった。彼等は戦前に東京で色々と世話になった祖母の安否を心配し、やっと居場所をつきとめて熱海まで会いに来てくれたのだ。祖母は「私のママちゃんは日本語より英語の方が上手だったよ」とよく話してくれたが、そんな母親に育てられた祖母は、戦前は自宅にアメリカ大使館の人たちを呼んでお茶をしたり、日本語を教えたりしたそう。祖母のいうママ

ちゃんとは、明治の初期に日本初の女子留学生の一人としてアメリカに派遣された大山捨松おおよすけまつだということを知ったのは、日本史の教科書にその名前を見つけた高校生の時であった。

私の中のアメリカ

戦後という言葉が使われなくなっってから数年後、私は祖母や母が話してくれたあのアメリカの地を留学生として心を躍らせながら踏んだ。横浜の波止場から貨客船に乗って。当時は、女性が留学などすれば、お嫁の貰い手がなくなると言われた時代だった。でも、私の中では、目に見えない赤い糸で繋がれているアメリカに行つてみたいという思いが消えることはな



くの・あきこ
慶應義塾大学在学中に交換留学生として渡米し、ミシガン大学などで学ぶ。帰国後、国際民間ボランティア団体CWAJで日本人および外国人女子留学生の支援活動を行う。花の万博時は国際陳列館副館長を務めた。2012年より現職。著書に『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』などがある。

私とアメリカとの繋がりは八十年を超える。日米の女性たちと一緒に、日本の女子学生が一人でも多く留学できるように奨学金を集めたり、日米両国の相互理解を深めるための交流プログラムを立ち上げたり、今も活動は続けている。今思えば、熱海で撮ったあの一枚の写真がその原点だったのだ。

ミュージアムと自然観

地球上では、さまざまな動植物がたがいに助け合い、利用し合いながら生命を育んでいます。私たち人間もその環を形成する要素の一つです。生きもののどうしの連環、そして、そこに関わる人間の役割がつくる〈輪っか〉について語っていた、サイエンス・コラムです。

林良博 東京大学名誉教授

世

界各地に「自然史博物館」が存在する。私が館長を務めていた国立科学博物館（以下、科博）の英語名称には、「Nature」が冠されており^{*}、自然観について知らんぷりはできない。そこで改めて自然について調べてみた。「自然」の読み方は、仏教用語として「じねん」があるが、一般には「しぜん」と読む。しかし自然薯^{しよ}が好きな私は、文字としての「自然」を見ると、食の方を連想してしまう。

自然薯は日本原産のヤマイモで、本州、四国、九州の山に自生しており、「山のうなぎ」と称されるほど滋養強壮効果があると信じられている。しかしその成長は遅く、一年で五〇センチメートルしか成長しないらしい。一方、栽培されている自然薯は、中世に中国から伝来したとされ、現在は北海道や東北地方をはじめ全国で栽培されている。「自然」の類義語に「野生」がある。野生は「人の手が加わっていない状況下で生き物が生存している」ことを指しているので、山に自生している自然薯はこの名でよいが、栽培されている自然薯はその名称を返上しなければならいかもしれない。

ウィキペディアによれば、私が専攻する自然科学は「自然現象を対象とする学問で、自然現象の把握に有効な概念を確立し、その法則性を明らかにする学問」とのことだが、科学・学問は人為の営みなので、その点では「社会科学」や「人文学」と変わるところがない。ところが自然科学と馴染みが深い数学は、自然法則でなく公理に基づく学であり、自然科学とは明確に分けられるという。ここま

で調べた限りでは、日ごろから私たちが考えている「自然観とは何か」にとって、あまり関係がないことが解ってきた。

「Nature」や「自然」

一般に「Nature」は、「自然の」または「自然な」という意味で用いられており、「ナチュラルメイク」のような表現では「わざとらしさが無い」ことが強調されている。自然を「人の手が加わっていない」野生に限定しすぎると、多くの人びとの「自然観」の理解を妨げることになる恐れがある。

話を科博に戻すと、来館者に「自然」を理解してもらうために、展示品を「野生」の生き物に限定

することなく、栽培植物や飼育動物も積極的に展示している。生命の起原や生物社会の成り立ちなど、自然科学や社会科学が単独で説明することが困難であった事象を来館者に理解してもらうには、野生種の展示だけでは困難だと考えられるからだ。

科博のすぐとなりにある国立西洋美術館で二〇二五年二月まで開催された「モネ 睡蓮のとき」は、連作〈睡蓮〉を中心に、印象派の巨匠クロード・モネの晩年の芸術を紹介した。モネが惹かれた日本庭園の睡蓮は、野生種ではなく栽培種だが、ほとんどの来館者は、

彼の作品から「野生の美しさ」を感じ取っているのではないか。

自然の理解を促す展示

科博の展示例を示そう。世界各地で飼育されているニワトリの原種は、現在も東南アジア熱帯地域のジャングルに生息するセキョクヤケイ（赤色野鶏）だと推測したのは、進化論の巨匠・チャールズ・ダーウィンだが、秋篠宮皇嗣殿下らの分子系統学的解析によって、この赤色野鶏説が明快に裏付けられたことは記憶に新しい。

写真のように、科博の日本館二階北「日本人と自然」コーナーに



北海道で育成された品種「ゆめぴりか」（国立科学博物館の展示より）
画像提供：国立科学博物館

は、日本で作出されたニワトリ十四品種が展示されている。いずれの品種も天然記念物に指定されているが、来館者が驚くのは尾長鶏だ。鳥類が恐竜から進化したことが明らかになった現在、哺乳類の二倍（約一万種）にもなる鳥類には、尾が長い鳥も多数生息しているが、尾長鶏の尾の長さは来館者を驚かせるに十分な長さで、とくにインバウンドで来日した外国人にとって驚異的である。

同じく日本館二階北「多様なイネ」のコーナーには、いかに日本人が北海道の稲作限界を乗り越えてきたのか、イネ標本の展示を通じて理解して頂いている。

北海道でイネの試作が始まった貞享二年（一九八五）以来、日本人は三百年以上の歳月をかけて種々の品種を開発してきた。ついに二〇〇八年、本州以南で栽培されている優良品種を凌ぐと多くの人が感じるほど、優良な品種が北海道で誕生したのである。

最後に、自然と科学の両者を館の名称に冠する科博において、最新の注意を要することがあるので



オナガドリの剥製（国立科学博物館の展示より） 画像提供：国立科学博物館



はやし・よしひろ
1946年広島県生まれ。解剖学者、獣医師。国立科学博物館館長、東京大学総合研究博物館館長、山階鳥類研究所所長などを歴任。専門は動物資源科学。

* 1 National Museum of Nature and Science

「マンガで読むコスモス国際賞」は、歴代のコスモス国際賞受賞者が、子供の頃の夢や世の中の課題や疑問にためめぬ努力で取り組み、世界的な偉業を成し遂げていく様子が、わかりやすく描かれています。花博記念協会では、このシリーズを通じて、若い世代を含む多くの人々が、科学を身近なものに感じ、未来を切り拓いていくことを目指しています。

マンガ制作は、日本で唯一のマンガ学部で知られる京都精華大学に依頼。これまで二〇〇六年受賞者のラン・スクマール博士、一九九三年受賞者のギリアン・プランス卿、二〇〇三年受賞者のピーター・H・レーブ博士の三冊を発行しました。

受賞者の人となり伝える

ひとりの人物の人生をわずか二十ページほどにまとめるのは至難の業ですが、「転機となった出来事」と「授賞理由に関わる出来事」の二つをポイントに据え、ストー

次世代育成事業 マンガで読むコスモス国際賞

花博記念協会では、二〇二三年より「マンガで読むコスモス国際賞」の刊行をスタートしました。本シリーズは、マンガを通じてコスモス賞受賞者の物語を紹介することで、賞の理解を深めるとともに、「科学的視点の大切さや地球環境問題について考えるきっかけとなること」を目的とするものです。現在三冊が刊行され、さらに二冊の制作が進んでいます。



作画：山下 茜



作画：山下 茜

リーを構築しています。

課題としては、絵にする場合、細かな情報が必要になることです。例えば、当時の服装や髪型、壁や屋根など家屋の形態、動物や花の特徴といったディテールがなければ、当時の状況を正しく描くことができません。そのための情報や時代考証については、監修者とはより受賞者自身からも、写真を送ってもらうなどの協力が不可欠です。

さらに、受賞者には専門的なアドバイスだけでなく、活動に取り組んだ理由や協力者、価値観を形

作った経験などを細かく尋ねるようになっています。具体例を挙げると、スクマール博士からの助言で、ゾウと人との軋轢解消を目指す研究では、動物のみならず植物の高度な知識や現地の人々との調整が重要になるため、植物や動物行動学が専門の共同研究者やフィールドアシスタントを登場させることになりました。

シナリオを翻訳し、いく度も修正と確認を重ねるため、時間も労力も必要ですが、マンガというメディアには、論文や講演からは知ることのできない科学者の人とな

りを伝える力があり、協会事業として大きな手応えを感じています。

幅広い世代が楽しめ、専門家にも役立つ工夫

本シリーズは「科学的視点の大切さや地球環境問題について考えるきっかけとなること」を目的としています。通常のマンガに比べると、「学び」が先行して手の出しにくいテーマかもしれません。そのため、なるべくストレスなく読んでもらえるよう、マンガ作家による視覚的な工夫はもちろんのこと、専門用語をできるだけ避け

て、わかりやすい言葉や文章で伝えるようつとめています。そのうえで、専門家が読んでも楽しめ、また役立つ情報が得られるよう、作中のキーワードや書籍から、研究業績などにアクセスできるように、情報の表記にも配慮しています。

現在は、二〇一六年受賞者の岩槻邦男博士、二〇二一年受賞者のピーター・ベルウッド博士の二冊が進行中で、令和七年度中にはシリーズとして五冊になる予定です。これを機に、今後は学校などへの寄贈プログラムの実施も計画しています。



作画：えのきろうちよう

編集後記

日本には「四季」がありますが、近年は春と秋があっという間に過ぎ、「二季」であるように感じます。昔の人は「二十四節気」や「自然暦」を用いて季節の移り変わりを味わい、自然に寄り添って生活していました。「二季」と感じるのには地球温暖化の影響ですが、山や川、生き物と触れ合う機会が減り、自然の変化に気づけないことも一因かもしれません。自然へ目を向けることの大切さを本号では考えさせられます。(花博記念協会 A.I)

『KOSMOS』の誌名にこめた思い

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。

藤

小輪の花に 神々が宿る 長寿の蔓植物

四月下旬から五月上旬にかけて咲くフジ。色名のもととなった藤色の小さな花を長く垂れ下がる花序につけ、桜が散った後の心寂しさを慰めてくれます。古くから観賞されてきましたが、『万葉集』に詠まれ『源氏物語』や『伊勢物語』などの古典文学にも登場します。また、フジの花の精が娘の姿で現れて踊る「藤娘」も、歌舞伎舞踊の人気演目です。

フ

フジはマメ科の落葉藤本で、ノダフジの別名、またはフ

ジ属植物の総称として使われます。日本にはノダフジとヤマフジが本州と四国、九州の山野に野生し、つるの繊維が織物に利用されるなど古くから日本人の生活に深く関わってきました。それらに中国から導入されたシナフジも加わり、数多くの園芸植物がつくられてきました。フジは寿命も極めて長く不死、不二に通じることから、古代信仰のなかで神々が宿る長寿の植物として捉えられてきました。

ノダフジの蔓は上から見て時計回りに、ヤマフジやシナフジは反時計回りに、他物に巻きつき、登っていきます。花序は長さ二十〜九十センチになり、フジ属のなかでもっとも長く下垂します。花が数多く咲き、開花期間も長いことから、特に改良・栽培されてきました。同じ咲き方でも、ヤマフジよりノダフジは花序が長いので咲

き終わるまでに時間がかかります。

高貴な紫色を愛でる

園芸品種のひとつ「ノダナガフジ」は大阪市福島区野田の地名に由来するノダフジの系統で、俗に「六尺」などとよばれ、花序の長さが特徴です。国の特別天然記念物の「牛島のフジ」(埼玉県春日部市)は樹齢千二百年以上といわれ、花序は最も長いもので二メートルほどあります。「アケボノフジ」は、淡紅色の蕾が開くと花弁の先が淡紅色になることから「口紅フジ」の名もあります。「イッサイフジ」はやや淡紫色の花で、接ぎ木をすると比較的短期間で開花するために鉢植え用品種として多く生産されます。

庭植えのフジの定番である棚仕立ては室町時代以降、鉢仕立ては明治以降のもので、奈良〜平安時代には松などの木に絡ませた姿を觀賞していました。松は常盤の縁

起木の代表で、上代の美を表し、

これに禁色の高貴な「紫」の花を重ねたのです。『源氏物語』には

「大いなる松に藤の先かかりて」と描写されています。(監修・倉重祐二)

【参考文献】

木村陽一郎監修「国説花と樹の大事典」一九九六年



[右]「牛島のフジ」(春日部市)
[左] 藤蒔絵硯箱、江戸時代、京都
国立博物館蔵 出典: Colbase

表紙の解説

「藤紫
ふじむらさき」

藤紫は藤の花のような明るい青みのある紫色で、藤色はそれより青みが薄い澄んだ色調から「若紫」とも呼ばれる。藤紫は江戸時代後期に普及し、明治には気品と優美さを兼ね備えた藤色が女性の着物地に好まれた。「写真」世界遺産・紀伊山地の山藤、「ガラス白地紫藤文鉢」(京都国立博物館蔵)、イソヒヨドリ、神前幕の幕房、藤花の煉切

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
情報誌 KOSMOS——こすもす

第15号

2025年3月31日発行

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号
TEL:06-6915-4500 FAX:06-6915-4524
URL: <https://www.expo-cosmos.or.jp/>

制作協力 株式会社ブックエンド
デザイン ごぼうデザイン事務所

©Expo'90 Foundation All rights Reserved